

第55回 SGRA フォーラム

テーマ：「戦後日本の平和論：戦後日本の平和テキストを読む」

日時： 2016年12月1日（木）午後1時30分から3時
言語： 日本語

会場： 韓国仁川・松島（ソンド）コンベンシア

主催： 渥美国際交流財団関ログローバル研究会（SGRA：セグラ）

趣旨：

本セミナーは、先夏の7月16日（土）、東京国際フォーラムで開催された「今、再び平和について—平和のための東アジア知識人連帯を考える」と題する第51回 SGRA フォーラムの後続プログラムとして企画された。同フォーラムの総合討論を通じて参加者たちは、東アジアの各地域にはそれぞれ異なる特殊な政治状況に置かれながらも、理念の違いや国の境を超えて訴えることのある「平和テキスト」があることを再発見し、これをこの地域の知識人が共同で読むことにより、平和の理想を現実政治の指針として蘇らせることができるとの認識を共有するに至った。その議論を受け、同セミナーが生まれたのである。

平和でない現実の中で平和を想像することを止めないこと。そのため、東アジアの平和テキストと一緒に読んでいくこと。これが、この地域の研究者たちが「知識人」としての役割を自認し「平和」のため連帯をするため、今求められていることである。

その折に、韓国仁川の松島（ソンド）で、東アジア日本研究者協議会が発足し、その第一回目の国際学術大会が開かれることになった。上記フォーラムを開催した「安全保障と世界平和」チームは、この学術大会に参加し、東アジアの日本研究者たちが集まり、冷戦期、脱冷戦期、3. 11後の日本において鋭く「平和」を説いた三つのテキストを読むことにした。

プログラム：

<司会>

李来賛（韓国・漢城大学）

<報告者>

1. 都築勉（日本・信州大学）、
「鶴見俊輔の戦争と平和--『転向研究』を読む」
2. 朴榮濬（韓国・国防大学校）、
「脱冷戦期、現実主義者の平和構想--田中明彦の『新しい中世』を読む」
3. 霍士富（中国・西安交通大学）、
「歴史叙述と現実記述とのジレンマ--大江健三郎『晩年様式集』を読む」

<討論者>

趙寛子（韓国・ソウル大学）、南基正（韓国・ソウル大学）、徐東周（韓国・ソウル大学）